

氏名(本籍)	佐々木 宏 幹 (秋田県)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第56号
学位授与年月日	昭和56年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	シャーマニズムの宗教人類学的研究—とくに東・東南・南アジアをめぐる—
主査	筑波大学教授 文学博士 直江 廣 治
副査	筑波大学教授 理学博士 川喜田 二 郎
副査	筑波大学教授 文学博士 綾 部 恒 雄

## 論 文 の 要 旨

本論文は、宗教人類学の視点・枠組・方法によって、主として東・東南・南アジア地域におけるシャーマニズム現象の宗教—社会—文化的な位置・性格・構造・機能の究明を意図したもので、序論、第1編(5章)、第2編(10章)、結論によって構成され、400字詰原稿用紙908枚から成る論をなしている。

筆者は序論において、シャーマニズム研究の諸領域とアプローチの仕方や視点について研究史を回顧し、シャーマニズムには現在なお未知の問題が多く含まれているとして、その究明に立ち向う自己の立場、すなわちシャーマニズムを人類に普遍の現象、呪術—宗教的複合に必然的に随伴する現象形態と見る立場を明確に示している。

第1編「シャーマニズムの基本問題」は、内外の研究者の理論的仮設や概念枠を吟味・整理しながら、これまで必ずしも明確ではなかった箇所を、実態調査の知見に基づいて修正したり、新たな視点や解釈を加えた諸論説から構成されている。第1章では、トランス(Trance)の概念について検討し、エクスタシー(脱魂)やポゼッション(憑霊)は、トランスの象徴的内容として捉えられるべき性格のものである点を指摘している。第2章は、ポゼッションの概念を扱い、日本の憑霊現象は他地域に較べて広く複雑であることを指摘する。第3章は、エクスタシー及びポゼッションの分布とその文化的意味について、南アジアを例に考察し、この型のシャーマニズムが農耕民族の間にも濃厚に分布している点を指摘する。第4章は、シャーマニズムと夢との関係を論じたもので、夢とトランスとは表裏を成するものであり、夢文化はシャーマニズム文化と深い係わりを持つ点を

指摘する。第5章は、祭司・シャーマン・王の相互関係について論じたもので、祭司性とシャーマン性とは相互補完関係にあるとの見解を示している。

第2編「シャーマニズムの諸相」は、実態調査と文献研究によって、日本本土、沖縄県、台湾、シンガポール、インド、パキスタンにおけるシャーマニズム現象の実態を、宗教民族誌的に整理したもので、シャーマニズムの社会・文化的基盤が主に追求されている。第1章は、岩手県釜石市のシャーマンの職能者のイニシエーション過程と儀礼を扱ったもので、当地における「神がかり」は生涯を通じて安定しているのではなく、霊媒型から予言者型へ、予言者型から祭司型へと、年令に応じて性格変化をきたすという事実を指摘している。第2章は、長崎県五島に分布するシャーマンの女性祈禱師の「神がかり」を扱ったものであるが、ここでは憑霊現象のみならずいろいろな靈感をも指す点が示されている。第3章と第4章は、沖縄本島・宮古・石垣・興邦国島におけるユタ的職能者の巫病カミダリー現象を扱ったもので、カミダリーの幻視・夢などに表象される超自然的存在についての指摘や、ライフ・ヒストリーの分析からカミダリー経験者の家筋や縁者にはカミダリーが発生していること、また経験者は幼少時からカミダリーを見聞していることなどから、それは文化現象として捉えらるべきであると指摘している。第5章では、カミダリー文化を個人・社会的状況の分析を手掛りにして、ユタ信仰が何故強固であるかという点を考察している。第6章と第7章は、シンガポールの童乩を扱ったもので、イニシエーションまた依頼者の依頼内容の分析を通じて、童乩の役割について考察し、精神・心理的異常の治療がもっぱら童乩の手に委ねられている点を明らかにしている。第8章と第9章はインド村落のシャーマニズムを扱ったもので、憑霊現象の実態・超自然観、シャーマンの役割を相互関連的に捉え、階層社会における個人にとって憑霊は欲求充足の過程を意味することを析出している。また、シャーマン個人の意識や行動が社会・文化的な諸条件とどのように係わり合うかという点について考察している。第10章では、東南・南アジア諸地域に展開するシャーマニズムに関して、特にシャーマンの超自然的存在への係わり方を比較考察している。その結果、単純文化の小規模社会では祭司とシャーマンの分化が不明瞭で脱魂型が濃厚であり、文化が高度化し大宗教の影響が著しい階層化社会では祭司とシャーマンの分化が顕著で憑霊型が支配的であるという見通しを提示している。

結論では、「日本シャーマニズムの性格について」と題し、全体を通じてのシャーマニズムの比較考察の結果を日本のシャーマニズムに関係づけ、日本シャーマニズムはトランス・憑霊の内容についても、役割においても幅があり、流動的で重層・混淆的である点に特徴が認められるとしている。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、筆者が永年にわたって取り組んできたシャーマニズムの宗教人類学的研究をまとめたもので、アジアにおけるシャーマニズムの研究水準を一段と高める独創的な立論が随所に提示されている。

従来シャーマニズムと言えば、北・中央アジアなどに特有の原始的宗教形態と規定する研究傾向が支配的であった。これに対して筆者は、シャーマンを「トランスのような状態で超自然的存在や領域と直接交流できる能力を有する呪術—宗教的人物（職能者）」と規定すれば、シャーマニズムは人類に普遍的な文化（宗教）現象であるとの見地に立っている。それはトランスや夢や脱魂・憑霊などの現象が人類に普遍的であるという意味において普遍性を持つとも主張する。本論文は、このような視点によって貫かれているが、各地域における筆者自身による綿密な実態調査の結果は、筆者の見解の妥当性を裏づけるように思われる。

筆者による釜石市・長崎県五島・沖縄県・シンガポールなどにおけるシャーマニズム現象の綿密な調査資料は、将来にわたって学界の共通財産として、その資料価値は高く評価されるべきものであるが、韓半島・台湾が空白であるのは惜しいことである。この地域に対する筆者自身によるインテンシブな調査が実施されるならば、本研究は一層充実したものになるであろう。さらに、第2編では全体としてシャーマニズムの社会・文化的基礎の追求は行届いているが、シャーマニスティックな儀礼の意味や役割に関する考察が不十分であるとの憾みが遣る。また、筆者がシャーマニズムの構造や機能の解明に関心を集中していることはよく理解できるが、シャーマニズムの歴史的・縦断的な視点も必要であろう。これらの点については、筆者の今後の調査・研究による補完を期待したい。總じて、今後に委ねられた課題を残しつつも、本論文がシャーマニズムと言う宗教人類学における難かしい領域の開拓に、独創的な視角とともに研究水準を一段と高める立論を随所に提示している功績は高く評価されるものである。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。